三博士のクリスマス

マタイによる福音書2章1節から12節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

イエス様は「ヘロデ王の時代に」お生まれになった、と聖書は伝えています。

これが最初のクリスマスだったわけですね。

しかし、クリスマスの場面として、今日の場面はどうでしょうか。

何かこう、非常に暗い雰囲気ですね。

イエス様はそのような時にお生まれになりました。

このヘロデ王という人が実は大変な人だったんですね。

この人は、残酷な王であったということで歴史に名前を残しているような人です。

自分が王になるために何人もの人を殺しています。

自分の立場を守るためにも、自分の親せきも次々に殺したような人なんです。

ついでに申し上げると、この人は自分が死ぬ直前には、エルサレムの町の有力者を皆殺しにしたと言われています。

自分を守るためならどんなことでもする、という人だったんですね。

自分を守るためなら人を殺しても構わない、という人だったんですね。

もう、こういう人にだけは王になってほしくない、という人だったんです。

その人のところに、占星術の学者たちがやってきました。

そして、この人たちはヘロデに対してまずい言葉を言ってしまいますね。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」。

これ、まずいですよね。

「ユダヤ人の王はどこにいますか」って、ヘロデは自分だけが王だと思っているんですから。

そんなことを言ったらヘロデはもうびっくりして、今度は誰を殺すか、という話ですよ。

「ヘロデ王は不安を抱いた」って書かれていますけれども、不安を抱えて黙っているような人ではないんです。

ですので、それを知って、エルサレムの人々も皆、不安になってしまったということですね。

4節で、ヘロデが国会を開きます。

「メシアはどこに生まれることになっているか」。

それを議員たちに聞くんですね。

メシアというのは、旧約聖書に預言されていた救い主のことです。

ヘロデは、占星術の学者たちが言っていたことは救い主のことだと気づいているんですね。

「ユダヤ人の王」と聞いただけでしたが、遠く東の外国からわざわざ占星術の学者たちが訪ねてきたので、これは旧約聖書に預言されていた救い主のことに違いないと気づいたんですね。

そのヘロデの質問に対して、議員たちは答えます。

ですけれども、これは問題ですね。

そんなことをまともに答えてしまったら、ヘロデが何をするかは分かるはずです。

実際、この後どうなったかというと、16節ですね。

ベツレヘムとその周辺にいた2歳以下の男の子を皆殺しにしたんですね。

どうして2歳以下なんだ、と思うかもしれませんが、今日の7節で、ヘロデは占星術の学者たちに、メシアが生まれたしるしの「星の現れた時期を確かめた」と書かれていますので、その星が現れたのが2年前ということだったのかもしれません。

次の8節で、ヘロデは、「わたしも行って拝もう」なんて言っていますが、もちろんそれは本心ではありません。

見つけたら殺すつもりです。

それは最初から分かっていることなんですから、議員はヘロデの質問に答えるべきではなかったんです。

第一、この議員たちは、もし救い主が生まれたというのなら、自分がそこに行くべきではないでしょうか。

行って礼拝するのが正しいことではないでしょうか。

でも、行こうとしないんですね。

ヘロデが恐ろしくて、救い主が生まれたと言っても、何もすることができない。

これは、恐れというものの恐ろしさですね。

自分のしていることが正しくない、間違っていると分かっていても、できない。

恐れに支配されてしまって、自分を守ることしか考えられない。

それはヘロデも同じだったでしょうね。

自分の立場が危うくなるかもしれないという恐れに支配されて、自分を守ることしか考えられないんです。

これは私たちも心したいですね。

恐れに支配されて、自分を守ることしか考えなくなると、もう、キリストのところに行くことはできないんです。

ヘロデも、議員たちも、町の人たちも、みんなそうだったんですね。

それに対して、占星術の学者たちはイエス様に向かっていきます。

神の民であるユダヤ人が恐れにとらわれて何もできないでいるんですが、外国の、それも占星術の学者が、イエス様に向かって進んでいくんですね。

これは大変なことです。

何しろ、学者といいましても、ここに書かれている学者という言葉は原文では「マギ」という言葉でして、魔術師を意味する言葉なんです。

神の民が自分のことしか考えていないのに、魔術師がイエス様のところに行こうとしているんです。

そこに、再び星が現れます。

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」んですね。

喜びなんです。

イエス様に向かう時には、喜びがあると聖書は言っているんです。

イスラエルの人々は恐れですね。

自分を守ろうとする時には、人は恐れに支配される。

けれども、この魔術師たちは救い主に会えるという喜びにあふれているんです。

幼子キリストに出会った学者たちは、ささげものをします。

「黄金、乳香、没薬」ですね。

どれも高価なものですが、じつはこれらは占星術の道具だったとも言われています。

つまり、この人たちは、自分の一番大事なものをささげたんです。

自分自身をささげたんです。

学者たちは帰っていきます。

しかし、その道は、来た時とは別の道なんですね。

これはもしかすると自分を危険にさらすことかもしれません。

何しろ、ヘロデから、「見つかったら知らせてくれ」と言われているんですから。

しかし、学者たちはもう、同じ道は歩まないんです。

考えてみると、占星術というのは、星の動きによって、普通には知ることができないいろいろなことを知ろうとすることですよね。

それは、要するに、自分を守ろうとしていたということです。

星の動きから情報を得て、自分を守ろうとする、それを仕事にしていた人たちです。

けれども、この人たちはもう、「黄金、乳香、没薬」をささげてしまいました。

救い主に全てささげたんですね。

そして、別の道を通っていくんですね。

彼らはその道を、恐れながら歩いたでしょうか。

そうではないでしょうね。

救い主が自分を守ってくださる。

その思いで、喜びにあふれて歩いて行ったはずです。

救い主に自分をささげる時にこそ、不安を抜け出せるんですね。

自分の力も、占星術の知識も、本当の意味で自分を守ってくれるものではない。

本当に守ってくれるのは救い主だ。

聖書はそう言うんですね。

私たちを恐れから救い出してくれるのは救い主キリストだ。

これは神のメッセージなんです。

何しろ、この場面での星の動きですよ。

9節で再び現れたと書かれていますけれども、東の国では見えていたわけですよね。

星が消えたり現れたりしているんです。

そして、星が道案内をしてくれて、幼子キリストの家で止まったんですね。

星が動いたり止まったりしているんです。

そんな星はありません。

神は言っているんですね。

救い主の前に進み出なさい。

そうすれば、恐れはなくなる。

この占星術の学者たちに学びたいですね。

この人たちは星の専門家ですよ。

だとしたら、星がこんな動きをしたら、普通は不安になりますよね。

自分の常識がまったくひっくり返されるような出来事なんですから。

けれどもここで、占星術の学者たちは、自分を捨てて、神のメッセージを受け入れたんですね。

そこに、喜びがあふれてくるんです。

私たちも、ならいたいですね。

私たちも、自分の「黄金、乳香、没薬」を主にささげたいと思います。

自分を守るためのものを捨てたいんですね。

捨てると言いますか、それをキリストにささげたいですね。

そして、救い主に守っていただきたいですね。

私たちそれぞれに、自分の心に聞いてみたいですね。

何が自分の「黄金、乳香、没薬」でしょうか。

私たちみんな、きっと、何かそういうものを持っていると思うんです。

それを差し出したいですね。

何しろ、今、私たちは、礼拝をしているじゃないですか。

救い主イエス様を礼拝しているんですね。

私たちは、イエス様を礼拝した占星術の学者と同じところにいるんです。

「黄金、乳香、没薬」をささげましょう。

そして、別の道を通って帰りましょう。

もう、ヘロデの元には戻らない。

ヘロデに従わず、イエス様に従う道を行きましょう。

恐れに従わず、喜びにあふれる道です。

新しい道、イエス様に守っていただく道を歩んでいきましょう。